

武富由雄(監修), 市橋則明(編)

# 「理学療法プログラムデザイン ーケース別アプローチの ポイントと実際」

福井 勉

文京学院大学保健医療技術学部理学療法学科

## ●グループトレーニングに最適な優著

「理学療法プログラムデザイン」は、著者らの臨床経験をケース分類した従来にはないタイプの著書である。片麻痺、パーキンソン病、体幹、肩関節、股関節、膝関節、下腿・足関節という分類も珍しい。例えば「歩行時の立脚中期～後期に膝のロッキングが生じる片麻痺のケース」、「股関節屈曲時に鼠径部の痛みがあるケース」、「歩行時に踵の痛みがあるケース」などと動作障害に標的を合わせて著者らの臨床的な工夫を詳細に記してある。

前書きにおいて、著者が最近の書籍が教科書の内容に終始し、臨床での問題解決にヒントとならない旨を述べられているが、まったくの同感である。臨床家が読む書籍が少ないのである。臨床において「成功体験に基づく知見」があまりみられないということは、由々しき問題ではないだろうか。具体的アプローチの重要性を著者は述べておられるが、これもまったく同感である。その意味では著者の具体的技術を提示した勇氣には拍手を送りたい。

また、本書には、いわゆる治療方法論の集約ではないりべらさがある。理由付けを運動学的に熟慮して

いるアプローチは有効なのであると伝わってくる。経験と創造の重要性を臨床家の体験に委ねているのである。臨床技術をさらけ出した以上、本書における1つひとつのケースにおける考え方や技術が真に世に通用する技かどうかは、まったく読者次第である。例えばここに示された個々のケースをみても、非常に参考になるという人は多いであろうが、もっとよい方法があると感じる読者もいるかもしれない。「著者はこのような理学療法を施行します。あなたはどのようにしますか?」と問われているようにも感じられる。そのため安易に教科書採用しても、病態のバックグラウンドや治療方法の優劣が判断できない教員には本書を教えることは不可能であろう。

本書を利用するモデルケースとしてお勧めなのは、まずはセルフトレーニングとしてである。昼休みに1ケースごとに試行錯誤を行って、著者と仮想上の技術的勝負を行うことが可能である。また、グループトレーニングなら尚お勧めである。同僚と本書を題材にして、お互いにトレーニングをするような方法もあると考えられる。

現在、少しずつこのような書籍が出版されてきたが、いずれも臨床的問題提起をしていただいたことは意義が大きい。読み進めながら考えさせられることも多く、自分の臨床経験ファイルとしていただきたいものもある。本書は目的にもあるように「あと一步臨床を深めたい臨床家」が対象である優れた書籍である。

●B5判・338頁・2色刷

定価 7,350 円(本体 7,000 円+税)

2009 年 文光堂・刊